

生野でコンゴウミドリヨトウを採ろう！

谷田昌也

コンゴウミドリヨトウ *Staurophora celsia* Linnaeus, 1758 は、ヤガ科カラスヨトウ亜科 Noctuidae Amphypyrinae に属する中型の蛾で、ヨーロッパでは古くから知られている種である。前翅は鮮やかな青緑色 (verdigris green) で、外縁および中央の帯と後翅は暗褐色。Culot (1909) も「この好奇心をそそるきわめて美しい種」と述べているように⁽¹⁾、派手ではないが、どこことなくヨーロッパの気品の漂うような美麗種で、ヤガの好きな人なら誰もが興味を抱く種の1つである。

本種の分布は広く、スカンジナビア半島南部、ロシアバルト海地方、ドイツ東部、スイス、ハンガリー、中央および南ロシア、アルタイ山脈、タルバガタイ山脈、東方シベリア、アムール盆地で得られ⁽²⁾、中国では新疆、黒龍江省、河北省に分布し、青海省には近似種 *S. tenuis* Warren が分布する⁽³⁾。さらに、朝鮮半島からは、1934年10月5日、江崎悌三博士が江原道温井里で1♂を採集され、当時日本領であったため、本邦より初記録として報告された⁽⁴⁾。この時、江原道の名山金剛山に因んで、コンゴウミドリキリガという和名がつけられたが、キリガという語尾がつけられたのは、本種がセダカモクメ亜科 Cuculliinae の1種であるとされていたためと思われ、今回、杉氏は、コンゴウミドリヨトウと改められた⁽⁵⁾。前述のように、本種はカラスヨトウ亜科 Amphypyrinae の1種で、本種を含む1群はborer, root-feederと呼ばれ、その幼虫がイネ科やカヤツリグサ科などの茎や根に潜入して加害するという、興味深い習性がある。我国からは、食用タケノコに潜入するハジマヨトウ *Bambusiphila vulgaris* (Butler) をはじめ、*Apamea*属など16種の幼虫の生態が報告されているにすぎず⁽⁶⁾、まだまだ幼生期が未知の種が多いが、ヨーロッパでは古くから研究が進んでおり、本種についても、Culot (1909) にすでに、幼虫がイネ科植物の根の中にいると記載があり⁽⁷⁾、また、Koch (1984) によれば、ドイツにおける本種の食草は、ヤマアワ、ハルガヤ、ヒロハノコメススキ、*Nardus stricta* であり、これらの植物の根を加害するという⁽⁸⁾。

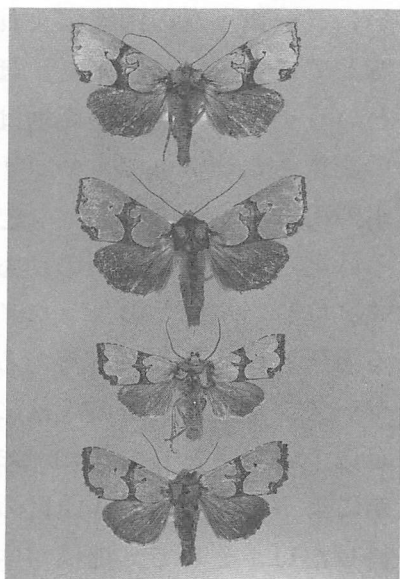
さて、本種が正式に我国で初めて得られたのは、1985年11月6日、岡山県新見

市においてである。この記録は、翌年4月に発行された「蛾類通信」に、採集者矢野重明氏によって発表された⁽⁹⁾。日本未記録種も珍しくない蛾界にあっても、このようなヨーロッパでポピュラーな美麗種が我国で得られたということは、この年の蛾界の話題の1つとなった。ヨーロッパの図鑑を見るたびに、こんな蛾をドイツに行って採ってみたいと思っていた筆者にとってもショックは大きく、中国縦貫に乗れば3時間くらいで行ける距離にもかかわらず、いままで一度も採集を試みていなかったことに、大いに反省させられたのである。しかし、この時得た中国地方に対する再認識が、第1回六虫会開催の原動力となったのだ⁽¹⁰⁾。

本種は、その後も矢野氏によって、1986年11月12日に1♂⁽¹¹⁾、1987年10月25日に1♀（矢野氏の私信による）と毎年1頭ずつ得られ、杉氏も指摘しておられるように⁽¹²⁾、土着しているものと思って間違いないだろう。写真は、ヨーロッパ産（フィンランド産）の♂♀と新見産の♂♀を並べたものであるが、日本産はヨーロッパ産に比べてひとまわり大きく、前翅中央の褐色帯の内側が比較的鋭く尖る傾向があるように思われる。しかし、一般に borer は、個体の大きさの変異の幅が大きいといわれることから、これらの特徴をして亜種とするのは、若干問題があろう。そもそも、日本産が3個体しか得られていないのだから、話にならない。ただ、前述した朝鮮半島の1♂も同様の特徴を有しているようにも思われ、これらが将来的に亜種となるのかも知れない。いずれにせよ、日本産をもっと採集するしかない。前述のように、本種の海外における分布は、ウスイロヒョウモンモドキの分布と類似しており、本種が中国地方に広く分布するかもしれない。すなわち、広島県や兵庫県からも本種が得られる可能性があるのである。

このことを裏づける事実が、実は存在する。1987年9月19日、第2回六虫会の一人一話の際、緒方正美先生より次のような話があったのである。

「いま、コンゴウミドリヨトウの話がありました。私の頭の中にあるのは、20数年前、兵庫県生野において採られたコンゴウミドリヨトウという記憶です。かつて、生野付近で蛾を採っておられたN氏（現在は どうして おられるか知りませんが）が岐阜



コンゴウミドリヨトウ(上より新見産♂♀
フィンランド産♂♀；矢野重明氏撮影)

県に移られ、そのお宅に伺った時のことです。たくさんの標本がありました。私は、その中にそれを見つけたのです。兵庫県生野町のラベルがついていました。しかし、私はそのとき、疑いを持ったのです。これは、おそらくヨーロッパの標本が間違っただけで交換か何かで混じったものではないかと。そのとき、私は厚かましくその標本をもらって帰ればよかったのですが、後年、私は、その人のヤガの標本をもらったのですが、その中にそれはありませんでした。虫に喰われてなくなったのか、他の人に譲られたのかはわかりません。いまにして思えば、それが最初の記録だったのかもしれない。」

20数年前に、本種がすでに生野で採られていたかもしれない。このことを確かめるためにも、何とかして生野で本種を採集したいものである。

では、本種を採集するためには、どうしたらよいのか。まず、本種は秋の蛾である。ヨーロッパでは9～10月に得られ、わが国においても、前述のように、10月25日に♀、11月12日に♂が得られており、おそらく10月中旬から11月中旬に得られるだろう。ただ、この時期の採集は天候に左右されやすく、いわゆる「秋晴れ」の前日は放射冷却により気温が下がり、何も飛来しないことがある。気圧の谷の通る前の、やや蒸し暑い晩を選ばねばならない。

次に、肝心の採集場所であるが、前述のように、本種の幼虫はイネ科の植物の根を食べるので、これではいったいどこでライトをつけたらよいか見当もつかない。ヨーロッパの図鑑によれば、明るい松林、乾いた針葉樹林、砂地の多い荒地などで得られ⁽¹³⁾、また、ほとんど植物のみられないような砂地で多く得られるという⁽¹⁴⁾。新見市の産地は、矢野氏からの私信によれば、「岩場ではなく、何の変哲もないアベマキやコナラの多い普通の林間で、谷ひとつ隔てたところに旧小野田セメントの採石地などがある」とのこと。採石地とヨーロッパの図鑑にある砂地とが関連があるのかもしれない。したがって、以上の点を総合すると、ヤマアワやハルガヤのようなイネ科植物が多そうな砂地や荒地を見下すことのできる場所ということになるだろう。生野周辺にこのような場所を見つけることが、シーズンが来るまでの（秋になるまでの）仕事ということになるだろう。

以上を参考として、1988年の秋には、拙稿の読者（もちろん筆者も含む）の誰かによって、我国で4頭目のコンゴウミドリヨトウが生野で採集されることを期待したい。そして、拙稿が中国山地の蛾相解明の1つのきっかけにでもなれば、望外の幸せである。

なお、最近、矢野氏によって得られたシマメイガの1種が、日本未記録種として発表された⁽¹⁵⁾。また、氏の私信によれば、コヤガの1種と思われる全く未知の種も採集されているとのこと。中国山地は、まだまだおもしろいのである。

末筆ながら、本種の採集地などについていろいろ教えていただき、貴重な写真を提供していただいた矢野重明氏、貴重な体験談の公表をお許しいただいた緒方正美先生、文献についてお世話になった木下総一郎氏、金沢至氏にお礼申し上げます。また、本誌の谷角素彦氏には、本稿の執筆が遅れ、たいへんご迷惑をおかけした。記してお詫び申し上げます。

参考文献

- (1) J. Culot (1909) Noctuelles et Géomètres d'Europe Volume I : 20.
- (2) A. Seitz (1914) Les Macro Lépidoptères du Globe 1^{re} Partie 3^e vol, Paléarctiques: 130.
- (3) 陳 一心 (1982) 中国蛾類図鑑Ⅲ: 313.
- (4) 堀 浩 (1935) *Calotaenia celsia* Linné 朝鮮に産す, むし 8(1): 20.
- (5) 杉 繁郎 (1986) コンゴウミドリヨトウについて補記, 蛾類通信 134: 136.
- (6) 杉 繁郎他 (1987) 日本産蛾類生態図鑑: 207.
- (7) J. Culot (1909) op.cit.
- (8) M. Koch (1984) Wir bestimmen Schmetterlinge.
- (9) 矢野重明 (1986) 日本未記録のコンゴウミドリヨトウを岡山県で採集, 蛾類通信 134: 136.
- (10) 谷田昌也 (1986) 第1回六虫会報告, 月刊むし 187: 29.
- (11) 矢野重明 (1987) コンゴウミドリヨトウを再び新見市で採集, 蛾類通信 140: 227.
- (12) 杉 繁郎 (1988) 1987年の昆虫界をふりかえって 蛾界, 月刊むし 204: 22.
- (13) M. Koch (1984) op.cit.
- (14) L. Lyneborg (1975) Moth in colour : 106.
- (15) 井上 寛 (1988) 日本から未記録のシマメイガについて, 蛾類通信 145: 305.